

校外施設の活用に関する研究（5）

東京学芸大学附属高等学校 松 本 至 巨
祖 慶 良 謙
森 棟 隆 一
日 渡 正 行
佐 藤 亮 太
花 園 隼 人

目 次

1. はじめに	118
2. 校外施設を活用した社会貢献	118
2. 1. 概要	118
2. 2. 初夏の研修旅行	119
2. 3. 夏の体験登山	119
2. 4. 秋の研修旅行	120
2. 5. 考察	120
3. 校外施設の今後のあり方	123

校外施設の活用に関する研究（5）

東京学芸大学附属高等学校 松本至巨
祖慶良謙
森棟隆一
日渡正行
佐藤亮太
花園隼人

1. はじめに

本研究は、本校で維持・管理している校外施設である妙高教育研究所（以後、妙高寮と略す）のさまざまな活用方法について考えるために2006年度から6カ年計画で始められたものである。2006年度から2009年度までの研究の成果は「東京学芸大学附属学校研究紀要第34集」、「東京学芸大学附属学校研究紀要第35集」、「東京学芸大学附属高等学校紀要第46集」および「東京学芸大学附属学校研究紀要第37集」に著しているので参照されたい。

これまでの研究では、妙高寮の歴史を辿ることにより、妙高寮設立当初どのような活用を見込んで設置されたのかを記念誌を用いて文献調査し、設立後どのように活用されてきたかを振り返った。妙高寮は生徒が本校で3年間過ごす中で、校内では体験できないことを体験するための貴重な教育の場として設立されたものだが、在学中に妙高寮を訪れることのできる機会は限られている。そのため、生徒以外の利用についても調べ、保護者対象の親睦旅行（在校生のみならず卒業生の保護者も含む）や本校の教員が実施している公開講座現職教員研修などの利用があることを紹介した。さらなる妙高寮の活用法を考えるため、東京都を中心に関東地方の高校の校外施設についても実態を調査した。

2010年度は、以上の研究・調査を踏まえ、校外施設を活用した社会貢献についていくつかの事例をもとに調査し、考察を行った。さらに本稿では、2006年度以降行ってきた研究の総括として、本校の校外施設である妙高寮の存在意義、問題点、改善点などをまとめ、その今後のあり方について提言する。

2. 校外施設を活用した社会貢献

2. 1. 概要

2010年度は、校外施設を活用した社会貢献について考えるため、妙高寮を1972年以来運営してきた株式会社泰山会が主催して実施した行事について調査を行った。株式会社泰山会の設立については「東京学芸大学附属学校研究紀要第34集」に述べてあるのでここでは割愛するが、現在この会社の経営を担っているのは本校の卒業生である。株式会社泰山会はこれまでは基本的に妙高寮の運営のみを行ってきたが、妙高寮の稼働率を上げるために、2010年度は初めて妙高寮での宿泊をとまなう行事を企画した。その内容は以下の通りである。

① 初夏の研修旅行

題名：妙高からみた日本・朝鮮関係史

講師：武井一氏（元本校公民科講師）

内容：妙高寮における講義のほか、朝鮮半島から渡来したといわれる御神体を祭る関山神社と渡来人が築いたといわれる新井古墳群の見学

実施予定日：2010年6月19日（土）～20日（日）

② 夏の体験登山

題名：妙高山登山

内容：生徒の林間学校と同様、燕温泉から妙高山に登山する。

実施予定日：2010年8月6日（金）～8日（土）

③ 秋の研修旅行

題名：食品衛生と自然毒

講師：町井研士氏（国立医薬品食品衛生研究所食品衛生管理部第2室長、本校PTA会長（当時））

内容：食品の正しい取扱・調理など食品衛生の基本と天然食材に含まれる毒についての講義

実施予定日：2010年10月9日（土）～10日（日）

この企画の①と③は、「東京学芸大学附属学校研究紀要第37集」で紹介した東京都立日比谷高校の校外施設である勝山寮で毎年行われている「勝山ビーチセミナー」を参考にして考案されたものである。東京都内から貸切バスで妙高寮に行き、午後は講演会、夕食時以降は懇親会、翌日の午前に講演会または実習（野外実習を含む）があり、昼過ぎに貸切バスで東京に向かうという計画であった（応募人数が25名以下の場合は新幹線とJR信越線を利用することに変更予定）。講演者は、「勝山ビーチセミナー」に倣って本校の卒業生を招くことも考えられたが、今回は妙高寮のある日本海側の地域の歴史や文化に詳しい教員（元本校公民科講師）や専門の研究機関に勤務している在校生の保護者（PTA会長）に依頼した。

②は、以前より親睦旅行に参加している保護者から要望があった妙高山登山を実現するものであり、登山の前日の夕方に妙高寮に現地集合し、翌日早朝から1日かけて妙高山を往復し、下山後もう1泊妙高寮で過ごし、翌朝解散とした（希望者は下山後すぐに帰宅することもできる）。この企画では安全に対して万全を期すために地元の登山ガイドに登山中の案内を依頼して実施した。妙高山登山については1年生対象の林間学校で行われているため、毎年一部の保護者の間で、体力的に厳しいという難点はあるものの、自分の子供と同じ体験をしてみたいという願望があるということを目にするのが多かった。

これらの企画は好評であれば、翌年以降も継続して実施することが考えられていた。①や③のような教養系の講座は、最近大学や自治体で行われている市民講座が人気である上、本校の卒業生や保護者には東京都立日比谷高校と同様に各界で活躍されている優秀な人材が豊富にいることから、それらの方々に講師を依頼して毎年1回程度継続して実施することは可能であると思われた。また、②のような登山についても、多数の参加者の応募がみられた場合には、来年以降の実施も検討されることになったであろう。

2. 2. 初夏の研修旅行

しかしながら、残念なことにこの企画は厳しい結果に終わった。①の初夏の研修旅行の応募者はたった4名にとどまった。4名の内訳は在校生の保護者2名、卒業生1名、卒業生の保護者1名であった。この企画は定員40名、最少催行人数15名と予め予告していたことから中止となった。

2. 3. 夏の体験登山

②の夏の体験登山は、定員10名（最少催行人数3名）としていたが8名の応募があったため実施された。内訳は在校生の保護者が7名、卒業生の保護者が1名である。

8月6日の夕方に参加者全員が妙高寮に到着して宿泊し、翌朝早朝に起床して登山を開始した。妙高寮の送迎バスで登山口の燕温泉まで行き、そこからいよいよ登山が始まった。このコースは夏休みの始めに1年生を対象に行われる林間学校の2日目に辿るルートである。妙高山の登山ルートは、妙高山南側の笹ヶ峰から入るコース

と燕温泉から入るものがある。燕温泉からのルートは古くから地元の人などによって使われてきた登山道であるが、全般的に急坂が多く険しいため、最近では比較的坂の緩やかな笹ヶ峰からの道を利用する人が多くなっている。しかし、今回の企画は林間学校で生徒が体験する登山を保護者が追体験するのが目的であるから、あえて燕温泉からのルートを選択した。この道は登山口から厳しい登りが続く。しかも頂上の少し下に森林限界があるため、夏は蒸し暑い樹林帯の中を延々と登ることになる。基本的には単調な登りが続くが、関川の支流の大田切川最上流部の北地獄谷の小川を徒渉したり、光善寺池とよばれる小さな池の端を通過したり、鎖が設置してある急な岩場をよじ上ったりと、山中に多少の変化も見られる。参加した8名全員が見事妙高山山頂に到達することができた。天気は比較的良好で、上空に薄い雲があったため直射日光に照らされることもなかったため、それほど暑さを感じることもなく快適に登ることができた。頂上からは遠くの間々や日本海を望むことはできなかったが、黒姫山や高妻山などの周辺の山々を見ることはできた。帰りは登ってきた道を下ることになる。順調に下ることができ、まだ太陽の高いうちに無事燕温泉に下山することができた。下山後、燕温泉の中の道の脇にある民間の温泉旅館が開放している足湯に浸かり、温泉を楽しみながら足の疲れを癒した。その後、送迎バスに乗り、妙高寮に戻った。その日は全員が妙高寮に宿泊し、夜はこの日の登山について振り返ったり、林間学校で子供たちが経験したことを思い浮かべたりしながら互いの親睦を深めた。参加者からは、自分の子供と同じ妙高山登山という体験ができてよかったという感想が聞かれた。



写真1 妙高山登山の様子



写真2 燕温泉の足湯で登山の疲れを癒している様子

2. 4. 秋の研修旅行

③の秋の研修旅行は、初夏に予定された①の企画の応募者がきわめて少なかったため、この企画においても応募者が少なくなることが予想されたことから、9月初旬に当初の計画を変更し、メインとなる講演を10月9日(土)の午後に本校内で行うことにした。株式会社泰山会では、初夏の研修旅行と同じように応募者が予告している最少催行人数を下回り中止になってしまうよりは、本校内で行うことによってある程度の参加者を確保し、講演だけでも実施したいという思惑があった。

当日は32名の参加がみられた。その内訳は、在校生が2名、在校生の保護者が21名、在校生の家族の関係者が2名、卒業生が2名、卒業生の保護者が4名、卒業生の家族の関係者が1名である。講師は秋の研修旅行で講師を依頼していた町井氏にお申し、講演内容も当初の予定されていたものを行ってもらった。前半は、生物教室で自然毒についての講義、後半は生物実験室に会場を移して食品衛生についての実習と解説を行った。講演は非常に好評で、特に後半は食品の衛生管理を行う上で最も重要である手洗いに関する実習であったため、参加者は普段の生活でも身近なこの実習に積極的に取り組んでいた。

2. 5. 考察

株式会社泰山会が企画した妙高寮を活用した行事のうち、予定通り妙高寮に宿泊して実施されたのは夏の体験

登山のみにとどまった。初夏の研修旅行は応募者が少なく中止、秋の研修旅行も初夏のような中止を避けるために本校内での実施に変更したことから、これらの企画は厳しい結果になったといわざるを得ないと感じている。これを受けて株式会社泰山会は、2011年度はこのような企画の立案をいっさい行わなかった。

株式会社泰山会では、2010年度の企画を皮切りに、妙高寮の閑散期に宿泊行事を設定し、稼働率を上げることを企図していた。「東京学芸大学附属学校研究紀要第34集」でも述べられているように、妙高寮の生徒の利用は年々減少しているため、妙高寮の宿泊数も全体的に減っている。妙高寮は自然に恵まれた場所にあるという利点を持つ一方で、冬は日本有数の豪雪地帯となることから除雪を頻繁に行わなければならない、初夏から秋にかけては草が繁茂するため外部からの火災の延焼を防ぐ目的で除草を行わなければならない。このため、妙高寮には一年を通して管理人をおく必要があり、そのための経費がかかる。にもかかわらず利用が少ないとなると、その存在意義にも影響を及ぼしかねない。以上から、株式会社泰山会では妙高寮の稼働率を上げるため、卒業生や保護者に広く呼びかけ、妙高寮設立当初の目的に即した体験を味わってもらうため研修や登山を企画したのであった。

しかし、これらの企画に参加を希望する人が思うように集まらなかったのはなぜだろうか。1つは、企画の宣伝不足があげられるだろう。これらの企画は、在校生の保護者と2010年3月に卒業した生徒の保護者にのみ紙面で案内が配られた。また、株式会社泰山会の経営の中心が本校の卒業生であることから、同窓会のホームページにもこの案内が掲載された。

これによりこの企画を知った本校の卒業生・保護者は多くいると予想できるが、今までになかったあまりにも急な企画であったため、すぐに参加を表明することができない人もいたのではないかと考えられる。「勝山ピーチセミナー」のように回数を重ねていけば本校の卒業生・保護者の間で認知度が高くなり、興味を持って参加を希望する人が増えてくるものと考えられる。このような企画のスタートは参加者を集めるのが非常に難しい。それなりに参加者を集めるのであれば、卒業生や保護者のネットワークを活用して、もっと積極的に宣伝しなければならないのである。企画を実施し、参加者の好評を得ることができればその認知度は高まるが、ある程度の集客力を持つようになるまでは、さらなる宣伝を続け、参加者を少しずつでも増やしていく必要がある。

また、在校生の保護者には、春（5月末または6月初め）・秋（10月末または11月初め）・冬（12月中旬）の3回の親睦旅行がある。これらの親睦旅行は、PTA会長が呼びかけ人となり、在校生の保護者と本校の教員が参加して週末に1泊2日で行われるものであり、その主な目的は、子供たちが林間学校等で利用する妙高寮を視察すること、保護者間の親睦を深めること、教員とともに教育について語り合うことである。春季親睦旅行は1967（昭和42）年、秋季親睦旅行は1970（昭和45）年からそれぞれ始まっており、ともに40年以上の歴史があり、在校生の保護者の間で定着した行事となっている。冬季親睦旅行は、1980年から1987年まで8回行われた（3月末に行われていた）後、しばらく企画されていなかったが、2006（平成18）年に復活し、20～30名の参加で実施されている。これらの親睦旅行は、本校の行事の1つとなっており、生徒を通じて紙面による案内が配布される。旅程は、初日午前中に東京から新幹線等で長野方面に向かい、午後観光し、妙高寮に宿泊、2日目は午前中に観光をして、午後新幹線等で帰京するように組まれている。旅行中の観光では、表1および表2のように妙高寮に近い長野県北部や新潟県南部を訪れている。親睦旅行の参加者は、複数回参加している保護者が多い傾向がある。これは、宿泊をともなう旅行という異色の企画に参加する人がある程度限られていて、それに参加する人は比較的活動的な場合が多く、それらの保護者が一度参加して互いの交友関係ができたりすると、次回以降も積極的に申し込むようになるからである。

最近では景気が悪くなってきていることから、経済的な理由で参加を見合わせる保護者もいると考えられる。図1は1991（平成3）年から2011（平成23）年までの春および秋の親睦旅行の参加者数の推移を示したものであるが、これを見ると春季親睦旅行は年によって大きな変動があるものの、あまり大きな傾向の変化は見られないが、秋季親睦旅行は1997（平成9）年までは110名から150名の参加があったものの、1998（平成10）年以降80名

表1 春季親睦旅行の訪問地

県	市町村	旧市町村	訪問先・施設
新潟県	弥彦村		弥彦神社
	燕市		国上寺
	長岡市		魚市場（寺泊）
	妙高市	妙高高原	赤倉温泉
		妙高	燕温泉
	糸魚川市		フォッサマグナミュージアム
		青海	親不知ビアパーク
長野県	信濃町		野尻湖、ナウマンゾウ記念館、小林一茶記念館、黒姫童話館
	飯山市		市内散策
	山ノ内町		丸池、発鳴温泉、東館山（志賀高原）
	小布施町		市内散策
	長野市		善光寺、川中島古戦場
		松代	真田邸、真田宝物館、象山神社、象山記念館、文武学校、北野美術館
		戸隠	戸隠中社、戸隠奥社、森林植物園、鏡池（戸隠高原）
	坂城町		新田醸造
	上田市		市内散策、池波正太郎真田太平記館
		真田	菅平高原
		塩田	信濃デッサン館、無言館、前山寺
	小諸市		懐古園、藤村記念館
	小谷村		柳池自然園（柳池高原）
	松本市		市内散策

上記の他、各地でそば打ち体験あり

表2 秋季親睦旅行の訪問地

県	市町村	旧市町村	訪問先・施設
新潟県	長岡市		市内散策、魚市場
	弥彦村		弥彦神社
	柏崎市		市内散策
	上越市		高田市内散策、春日山城跡、岩の原葡萄園
	妙高市	妙高	燕温泉
		妙高高原	妙高ビクターセンター、池の平温泉、苗名滝、いもり池
	長野県	信濃町	
	山ノ内町		志賀山文庫、豪雪の館、地獄谷温泉、志賀高原、白根山
	中野市		中山晋平記念館
		豊田	高野辰之記念館
	小布施町		市内散策、北斎館
	須坂市		市内散策、世界の民俗人形博物館、豪商の館田中本家博物館
	長野市		善光寺、信濃美術館、川中島古戦場
		戸隠	戸隠中社、戸隠奥社、森林植物園（戸隠高原）
	松代		真田邸、真田宝物館、象山神社
	坂城町		新田醸造
	上田市		上田城
		塩田	信濃デッサン館、無言館、前山寺、別所温泉
	東御市		海野宿
	小諸市		布引観音
	軽井沢町		旧軽井沢
	白馬村		ジャンプ台
	松川村		ちひろ美術館
	安曇野市		大王わさび農園、礫山美術館
	松本市		松本城、市内散策、浅間温泉

上記の他、各地でりんご狩り、そば打ち体験あり

から105名の参加となっている。バブル景気が後退してきたのは1990年代後半であることから、親睦旅行の参加者の減少もこれと少なからず相関があると考えられる。

秋の研修旅行の代替として本校内で行われた講演会には30名以上の参加があったことを考えると、妙高寮での宿泊が大きな要因になっているということがいえる。つまり講演は聴きたいが、1泊2日という時間をかけて参加することは難しいのである。これは経済的な要因もあるだろうが、やはり時間的な要因が大きいのであろう。平日は勤務している人にとって、土曜・日曜の休日はゆっくりと体を休めたいというのは当然のことであり、それらの日を研修旅行に費やすことにはかなりの決断が必要となる。妙高寮は東京から距離的に遠いため、移動時間が長くなり、移動による疲れも心配される。同じ講演会であっても、休日の宿泊と妙高寮の立地が参加者を集めることを困難にしているということもわかった。

このような点をふまえて在校生の保護者の立場で考えると、親睦旅行がある上に株式会社泰山会の当初の企画に参加するという事は、時間的・経済的な面から考えてかなり厳しかったと察することができ、この企画を魅力に感じたものの参加を申し込むまでに至らなかったものと予想される。

以上のことから、株式会社泰山会主催の企画への応募者が少なかった主な要因として挙げられるのは、親睦旅行の存在、妙高寮での宿泊、そして宣伝不足の3点である。企画について考察してみると、初夏および秋の研修旅行は学術的価値があり、夏の体験登山も林間学校で生徒が登る妙高山の登山であるので、本校の関係者にとっては興味のある内容といえる。現に夏の体験登山は在校生の保護者を中心に応募があり、実施することができた。秋の研修旅行の代替として本校内で実施した講演会には30名以上の参加者が見られた。内容のわりに研修旅行の参加者を集めることができなかったのは、親睦旅行の存在と妙高寮での宿泊が大きいのだろう。休日に東京か

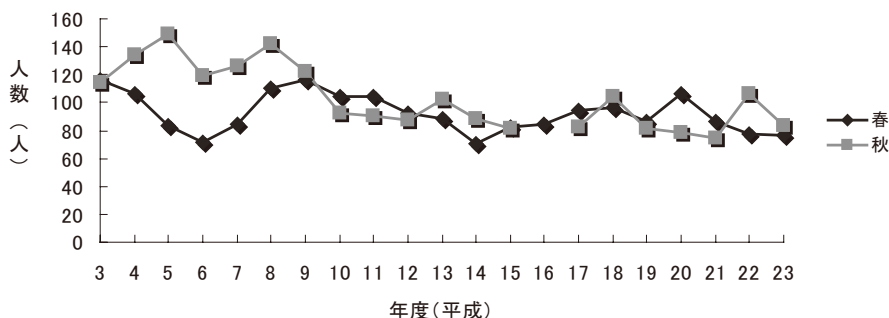


図1 春季および秋季親睦旅行の参加者数の変遷

ら200km以上離れた妙高寮に宿泊してまで講演を聴きにいかうとするには相当の決断が必要となる。親睦旅行に参加する在校生の保護者には、さらに時間的・経済的に厳しいであろう。また、宣伝不足が応募者の少なくなった原因の1つであることも否めない。同窓会のネットワークを活用して卒業生にも積極的に宣伝すべきだったのであろう。また、初回は少人数でも実施し、その参加者にも宣伝に協力してもらい、回を重ねるごとに少しずつ大きくしていくというような考え方も必要だったのかもしれない。今回の株式会社泰山会の企画は、講演や登山といった内容は価値があるものの、比較的類似した行事の存在や遠隔地での宿泊、宣伝不足が原因で参加者を集めることができなかつたと考えることができる。

3. 校外施設の今後のあり方

ここまで校外施設について、本校の妙高寮を中心にさまざまな活用の様子を見てきた。ここでは、妙高寮における問題点や改善点を挙げ、今後のあり方を考えていきたい。

妙高寮が抱えている大きな問題は、維持に相当の経費がかかっているにもかかわらず、その利用が少ないということである。先述の通り、妙高寮に1年を通して管理人をおいている。これは、妙高寮を設置する際に、夏は登山、冬はスキーができる自然豊かなところを選んだ結果、施設を維持するために夏から秋にかけての除草や冬から春の初めまでの除雪が必要となり、それらの作業をしてくれる人を1年間雇わざるを得ないということになったからである。管理人を雇うのにはもちろん相当の経費が必要であり、また除雪などを行う際には作業をするための機械や燃料なども必要となるため、さらに維持費がかかっている。

それに対して、妙高寮はどのくらい利用されているのだろうか。本校関係者による1年間の主な利用を挙げてみると、5月に春季親睦旅行（1泊）、7～8月に1年生の林間学校（4泊×4回）、8月に部活動の夏合宿（3～5泊、卓球部、天文部、弓道部の3部）、10月に秋季親睦旅行（1泊）、12月に冬季親睦旅行（1泊）と2年生のスキー教室（3泊）がある。これらの利用日数を合計してみると1年間で40日程度にしかならず、日数による利用率は10%強という低い値となっている。本校以外の団体が利用しているものとして成城大学弓道部合宿（3泊）があるが、それを足しても50日程度しか利用されていないのが実情である。「東京学芸大学附属学校研究紀要第34集」に示されているように、以前はスキー学校があつたり、もっと多くの部活動が妙高寮で合宿を行っていたため、利用率はもっと高かつた。このように過去に行われていたスキー学校や部活動の合宿を妙高寮で行うためにはどのようにすればよいのだろうか。

部活動の合宿が減少した最大の理由は施設の問題である。以前はサッカー部が妙高寮を利用して夏に合宿を行っていたが、当時は妙高寮の近くにある大手企業の保養施設のグラウンドを借りて練習を行っていた。しかし、景気の悪化によりこの大手企業は妙高の保養施設を閉じることとなり、当然グラウンドも閉鎖となった。また、男子バスケットボール部や男子バレーボール部は妙高寮の体育館を利用して合宿を実施していたが、体育館が少し狭小なため人数が多いと効率の良い練習が行えないという理由から他の民間の施設に合宿先を移行した。このように部活動の合宿に適した施設が妙高寮には不足しているといえよう。

また、最近では民間の施設が安価で学生の合宿を受け入れるようになっているということも原因の1つである。さらに、妙高寮は先述の通り東京から約260kmもあり、この移動のために時間と費用がかかる。部活の合宿では、参加する生徒の往復の交通費が割高になるとともに、生徒を指導する卒業生の交通費もかかり、また多忙な卒業生が短い休暇を使って指導に行こうとしても往復の移動時間が大きなネックとなり、指導者が集まりにくいという欠点が指摘されている。

スキー学校では、妙高寮が運営していた坪岳スキー場が閉場して以降、関温泉や赤倉温泉まで生徒を輸送する必要が出てきたため、妙高寮とスキー場の間の輸送費などが余計に必要なになっている。

妙高寮の利用を増やすためには、まず生徒の利用を増やすことが重要である。本校は行事が多いため、妙高寮

を利用するための新たな行事を作り出すことは困難である。したがって、現在行われている行事のうち妙高寮で実施可能なものを行うようにする必要がある。そこでまずは以前妙高寮で実施していたものを再び妙高寮で実施することが求められる。妙高施設委員会では、今年度スキー学校と部活動の合宿の誘致を積極的に行った。

時を同じくして、今年度妙高寮の運営は株式会社泰山会から社団法人泰山会に移行した。社団法人泰山会はこれまでであった後援会泰山会を法人化したものである。これにともない、妙高寮の宿泊費が低廉となり、生徒をはじめ利用者にとっては非常に利用しやすくなった。

妙高施設委員会では、まず2000年度を最後に途絶えていた1年生対象のスキー学校を、2012年度から妙高寮で実施する方向で準備を始めている。妙高寮の宿泊費が下がったことで、妙高寮と赤倉温泉スキー場の間のバス輸送の運賃を入れても少ない費用で実施することができるようになった。赤倉温泉スキー場としてもスキー人口の減少とともに、北陸新幹線が開業しても近くを通らないためにさらなる利用者の減少が見込まれることから、本校のスキー学校の実施にはきわめて協力的であり、充実した指導と安全の確保について尽力してくれるものと考えている。

部活動の合宿についても、妙高施設委員会では誘致するための活動を行っている。部活動の合宿では活動するための施設の確保が重要であることから、妙高市内で本校の生徒が安価で利用できる施設を探した。その結果、妙高市が運営している体育施設が利用できることが判明し、各部活に対してこれらの施設の案内を配布し、妙高寮での合宿の検討を依頼した。また、妙高寮内で実施可能な部活については、活動をする上で必要とされる物品等を充実させることを条件に実施を検討してもらうことにした。その結果、囲碁部は2012年の春合宿から妙高寮で実施することになった。現在、妙高施設委員会では、妙高寮のある上越地方の高校に対し、本校の部活の合宿中に交流試合の実施を依頼することも検討している。

しかし、妙高寮が本校のある東京から遠いという点については、あまり解決策が見当たらないというのが実情である。遠いからといって寮を妙高よりも近いところに移すことは困難である。本校の多くの部活動が合宿を実施している山梨県や長野県南部と比較すると、妙高寮は明らかに遠隔地であり、東京との往復にかかる移動時間が長く、交通費も高額になる。山梨県や長野県南部の高原地域は夏涼しいため気候的にも合宿に適しており、安価で充実した施設があれば合宿地として利用したくなるであろう。東京都立日比谷高校の校外施設である勝山寮も東京から陸路で約110kmの位置にあり、妙高寮の半分以下の距離である。1997年に東京湾アクアラインが開通してからはさらに便利になり、在校生や卒業生も比較的足を運びやすいものと考えられる。距離の問題を妙高寮が根本的に解決するのはほぼ不可能であるが、寮の送迎バスを長野新幹線の長野駅まで運転するなど、できるだけ利用者が経費や時間をかけずに訪問できるような方策を編み出していきたいと考えている。

生徒の利用のほかに、今後も在校生の保護者対象の親睦旅行は継続していくが、卒業生やその保護者の利用も促進していきたいと考えている。今までにも卒業生の保護者が親睦旅行で妙高寮を利用するということがあったが、今後は卒業生自身にも積極的に妙高寮を利用してもらいたいと思っている。林間学校やスキーをはじめ、本校で過ごした日の思い出をゆっくりと語り合える場にしてもらいたいと思う。さらに、在校生・卒業生の家族による利用も推進していきたい。表1および表2に示したように、妙高寮の周辺には多くの観光地が控えている。それらを周遊する際の拠点として利用してもらえるように、妙高寮の存在をアピールしていきたい。

今後は、本校の関係者を介して、本校以外の外部の団体にも利用を呼びかけていくことも考えている。例えば、東京学芸大学をはじめとする大学や高校の部活動・サークル、妙高寮の地元である上越地域の学校や団体にも利用を働きかけていきたいと思う。

本稿では、本校の校外施設である妙高寮が林間学校やスキー、部活動の合宿など生徒のための教育活動にはなくてはならない施設であることが再確認された。また、妙高寮の閑散期の利用率を高め、その維持経費の無駄を少しでも少なくするために、卒業生や保護者、およびその関係者の利用を促進し、妙高寮のよさを広く知ってもらうことにより、その存在意義がさらに理解されていくものと考えている。

(文責 松本 至巨)